



六
花

6

2021

りっかはいくかい

雉子の声



山田六甲

てのひらの文鳥ぬくし麦の秋

六月二十六日

磯野家は青之里さんの覆盆子かな

目くばせをし合うてをれば雉子の声

草むらに雉子の卵を盗み見て

城垣の石の目となり落椿

首もくしゆく蓆しゆくに伏せてぬしころ問題児

首蓆はしろつめ草

青葉せる榎大樹や少年期

千

凧合戦今年も流れ子どもの日

見るからによろけさうなる団扇まき

お水取の竹立てかけて焦げてあり

藤踏みし下駄の鼻緒をすげてやる

進みつつ発は条ねは無限に蝸牛

ふと我に返つて落ちし揚ひばり

割ばしの指に弾けて冷し蕎麦

振り向かば妹背ははるか閑古鳥

梓川

忘れ潮 ◎ 笹村 政子

春浅し亀は甲羅の向きを変へ
初ざくら化粧に疎き吾子なりし
枝先の余力のゆれや枝垂梅
一茎に一花の孤独チューリップ
先生の影踏むあそび草萌ゆる
ふるさとの杉菜の土手の匂ひかな
影ふかき平屋の生家鶴帰る
嫁ぎたる子の本籍地鳥帰る
白魚やのけぞり揚ぐる四つ手網
寂しさは春のうしほの忘れ潮

政子の作品、

▽甲羅干しをする亀が日差し角度によって寒くなり向きを変えたのを捉えた。浅春らしい捉え方。

▽チューリップは一茎に花を一つ咲かせる。桜などは一枝に沢山花をつける。その対比で孤独ではないかと思いつたのだ。人も一体に一つの肉体しか持たずいわば孤独である。孤独を愛する人もいれば淋しいとおもう人もある。しかしチューリップの場合は一本が集まった美しさを持つ。日本では富山県の砺波がチューリップで有名。オランダも。花言葉は「思いやり」イスラエルでは聖書に登場する岸辺のユリ、シャロンのバラはチューリップだといわれている。つまり他人には精一杯の思いやりをみせるが本人は孤独なのである。

▽白魚を揚げる四手網のようすをのけぞっていると表現。四手網は大きい網の目は細かいので、まるで水を掬いあげる格好である。四手網も揚げる人も、のけぞっているのであると詠んだのだろう。

▽春先になると太陽の光も少し強くなり、影も濃くなる。校庭で影ふみ遊びをした思い出が草萌えの地に蘇った。懐かしい思い出に浸る。

▽「忘れ潮」というの満潮時にたまった海水が、潮が引いてもそのまま残っているものをいう。ただ、その名称によってなにか哀れを誘うのは言霊のせい。残された潮も残した潮も、どちらも哀れなのである。

5月「たんぼの契をかざせば風となる」は青木朋子さんの共鳴句。

春子 ◎ 志方 章子

青海苔を摘みし岩肌指匂ふ
裏庭の寒椿もう見飽きたり
バス停を降りれば山の笑ひけり
紫木蓮の蕾大きく明日は咲く
紙袋湿りてをりぬ春子かな
紅梅のあと白梅に目を洗ふ
草萌の一足ごとに匂ひけり
夫の居ぬ吾が誕生日春浅し
梅紅し淋しきことを口にせず
顔寄せて梅が香嗅げる遺影かな

章子の作品

▽庭にある寒椿毎日見ているともう見飽きたという。寒椿は花の時季がながいのかつくづく見飽きたのだろう。花の命はやはり短い方がいいのだろう。

▽紅梅を観ていて目が疲れた、というのを汚れたと感じて、白梅に目を移すと目が洗われた気持ちになったというのが佳い。こういう心の動かし方は六花の人たちにも浸透して来ているのだが、この句で打ち止めたほうがよいと思う。このような見方が結社で流行り出すのはよくないと思う。

▽前句よりも草萌の句「一足（一步）ごとに匂いだす」という把握の方が新鮮で清々しい。

▽夫の居ない誕生日の句、生前は二人で乾杯していたが、今は祝いあうこともなく静かな誕生日で寂しさがドスンと音を立てて来るようだと嘆く。しかし章子も徐々に気持ちが癒えて六月ころから句会に出たいという。夫俳句をどんどん詠んで寂しさを洗い流す方法をとった章子の素晴らしさを称えたい。

▽バス停・山笑ふの作品。バス停へ降りればというのはバス停へ降りて歩き始めると、という意味だが、バスの中では気が付かなかった、山々の姿がすっかり芽吹き初めて嬉しくなった。ということである。人はバスの中の座席にいるときと、外に出て歩いているときと光（景色）や空気の匂いで気分が大きく違う。つまり五感で早春を感じているのである。このときの感情感動が句を生ませたのである。

5月「線香に花の香りや春浅し」は青木さんの共鳴句。

ねこ柳 ◎ 升田ヤス子

柵の綺羅をまとひいて猫柳
虫が来て鳥きて枝垂れ梅となる
空に水脈描きて鴨の帰りけり
束ね捨つ俳句の手帳鳥雲に
芽柳の触れなばくすと笑ふべし
野遊びや城跡アップダウンして
伏せ置かれ鐘の天女のおぼろかな

日岡神社日本武尊誕生のしきたり

神官の担ぐ榊や亥巳籠
氏子かと吾の問はるる亥巳籠
神主はくぐもり声に物鎮め

ヤス子の作品、

▽柵と書いて「しがらみ」と読む。水の勢いを弱めるため、川の中に杭を一定の距離に打ち並べ、柴や竹などをからみつけたもの。その「しがらみ」を抜けて泡立つ水に春の光が乱反射して眩しい。その近くには猫柳の銀色の衣とも互いに反射し合う。主宰が兼題に「猫柳」を出したから、皆で探して歩いたという。加古川市のような山奥でも今は見当たらないという。見当たらなくても探したという行動が尊いのだ。因みに狩行先生に「しがらみを抜けてふたたび春の水 狩行」という名句がある。人の世にもさまざまな問題軋轢が起きるが、その柵の時季を過ぎると再び穏やかな流れに戻ったという句である。

▽北国へ帰ってゆく鴨が水面でなく、空に水脈を描いたという気づきが佳い。この句にはヤス子の新しい一面が出て、このひとまだまだ進化していると思う。

▽「鳥雲に」の句、書き溜めた沢山の句帳を纏めて捨てたという。随分思い切ったことをするものだと驚くがそれも前進するための覚悟のようにも思える。実年齢でなく脳内年齢の若さで何か区切りをつけ、新しい世界を覗こうとする気持ちが若い。その潔さが素晴らしく、見習いたいと思う。

▽亥巳籠（おいこもり）は、ヤマトタケルの誕生の際、人々が安産を祈って、屋内にこもったという伝承にちなんだ伝統行事。皇子は双子で生まれられた。

5月「蟬梅の雨滴となりて零れけり」は青木さんの共鳴句。

春月 ◎ 藤生不二男

茅花野にやはらかき日の差しきたる
一村をやり過ごしたる飛燕かな
本殿の灯明暗し鳥の恋
春月の離るる山の暗さかな
木蓮のかさなり落つる風のあり
おほかたは黄の一色に莖立てり
引鶴の風をとらへし空のあり
春雷の音ながながと緒を曳けり
天日に白木蓮の咲きにけり
小手毬の枝ごとゆれてゐたりけり

不二男の作品、

▽「天日」という言葉が何か示唆しているのかと調べて見るとその苗字が多いのは石川県だという。それほど太陽光が欲しい地方ということか。よく晴れた青空に咲く白い木蓮は一層白色が映える不二男ほどの人なら知っていると思うが、「まさなる空より枝垂桜かな 富安風生」を意識しているのかも。

▽春南方から燕が来て、一つの村に来ることなく無視して他の村に去った、ということか。要するに人の住まなくなつた過疎地か限界集落を通り過ぎた淋しさを燕によつて感じさせた句。燕に関連しては、夏燕、燕帰る、燕の子などがあり、春半ば、南方から渡つてきて、人家の軒などに巢を作り歌には詠われなかったが俳句では好まれる季題。

▽春月の山入端を離れると山が暗くなるのを感じたのだという。それは物理的でなくおそらく感覚的にそうかんじたのであろう。われわれ、少なくとも私は月の方に注意が惹かれていたので山の端の方に注意を向けていなかったのだ、これは不二男の俳句的気づきである。

▽莖立の句、春の遠望で菜花など春の莖立ちには黄色の花が多いということをおほかたは「と言ひ換えたのである。引き鶴の句は「風をとらえた」というところを詠んでいるが読者には「捉えた空」が伝わり難いだろう。意味は安定飛行に入ったということか。主語が「空」という作者の思いが伝わるか伝わりやすいか疑問である。

▽小手毬の句、不二男の興味のあるところが見えるがさて。

5月号「真向へば眼差しつよき雛かな」は青木さんの共鳴句。

下萌の別れ ◎ 善野 行

印南の野の下萌の別れかな
大池は漣ばかり鳥曇
猫柳ぎゆつと抱かれしその昔
猫柳瀬石ひかりに洗はれて
川に来て心地晴れたり猫柳
川波の光飛ばせる春の道
大空を喝采したる辛夷かな
あたたかやおどけてみせる異邦人
雲雀鳴く声の坩堝やそこかしこ
春風やそろり公達ぶりをして

行の作品

▽印南は和歌山県と兵庫県にあるが掲句は兵庫県の稲美町にある平野で「播磨風土記」にでてくる景行天皇の妃の生誕、冷泉家の発祥の地。近年ではオマーンの王妃も生まれており、その王妃のお墓も稲美町にある。その歴史ある地の北側に行は住んでいる。「下萌えの別れ」の場面設定が、岡本高明の「車前草を踏んで接吻したりけり 高明」を思い出す。彼はその句を発表しなかったが、大阪の呑み屋で「この句どうや」と言った。彼は同郷の西東三鬼に似て随分と人妻、女性に持てたから、その時の実体験だろうと感心した。さて、掲句はどのような女性か知らないが……。

▽猫柳の句、「瀬石ひかりに洗はれて」に彼のまれな才能を見る。

▽「光飛ばせる」の句、春の水のきらきらとした眩しさを「光飛ばせる」と表現した新鮮さを買う。小路紫峽の「光を飛ばす初鏡」というような句があったと思うが正確ではない。行はおそらく知らなかったはずだし、その感覚は類想ではなくかれ本来の感覚が生み出した物であろう。川べりに春の水を凝視して向うから飛び込んだ言葉と感覚である。

▽この句もコブシ（辛夷）の様子を覗いていて大空に向かって喝采の拍手を送っているように見えた感覚が瑞々しい。夢風撰。

▽雲雀のにぎやかな囀りが姦しく、声のるつぼと感じたのもさすがである。

▽春風の吹き方が、親王・諸王など、皇族の人々。撰閨家・清華家（せいがけ）などの子弟・子女の歩きぶりのように気品を感じ取ったのである。

鯛の夢 ◎ 住田千代子

亥巳籠猫はそろりと歩みけり
煮凝や琥珀に溶けし鯛の夢
神祀る紙垂より白き梅の花
梅淋し古事記の神といふ祠
山茱萸の花の向うの城の空
木の橋を渡りし所菖蒲の芽
黄梅の纏れ明るき風の中
城へ向く巢箱傾きるたりけり
からつぽの巢箱の口に光差す
幸先の良き日はけふと鳥帰る

千代子の作品。

▽亥巳籠（おいこもり・いみごもり）は、ヤマトタケルがこの地で誕生の際、人々が安産を祈って、屋内にこもったという伝承にちなんだ行事。音を立ててはいけませんが、猫はそこまで気を遣う必要はないのにねえ、というのである。その肉球を使った歩き方にユーモアが含まれている。ここが千代子の句境の進化である。

▽煮凝りの琥珀色という気づきと鯛の煮汁で出来た煮凝りに鯛の夢が溶け込んでいるというのが佳い。

▽紙垂（しで）よりも白い梅の花も巧い。神社などの注連に飾られる紙垂の色について、神域らしい無垢の色より白い梅の花と言わしめた詩の力が備わってきたのだとわかる。文献での紙垂の例として、「古事記」の天の岩戸伝承のなかで書かれていて、岩戸の前で賢木の枝に下げた「白丹寸手（しらにきて）」「青丹寸手（あをにきて）」がその初出と言われている。紙垂のいわれは沢山あるが、以下は省く。しかし岩戸の前では派手に踊って音を立てて騒いだというのと真逆で音を立てないで鎮まるという矛盾をかかえていることにもあれこれ想像がめぐる。

▽以下の句は過去の吟行から思い起こして詠んだのであろう。すべてにロマンがある。

大空を喝采したる辛夷かな 善野 行

こぶしの咲く山を形容するのに「喝采」を幹旋したのがいい。「春よ来てくれてありがとう」とこぶしの花たちが拍手喝采をしているのだ。読者も大空になって舞台の上からお辞儀をしている場面を思い起こす。季語「辛夷」春。六甲

猫柳瀬 石光に洗はれて
印南の野の下萌の別れかな
大池は漣ばかり鳥曇
猫柳ぎゆつと抱かれしその昔
川に来て心地晴れたり猫柳
川波の光飛ばせる春の道
あたたかやおどけてみせる異邦人
雲雀鳴く声の柑塙やそこかしこ
春風やそろり公達ぶりをして

空家かと思なされてゐる春落葉 大内幸子

我が家の庭に春の落葉が落ちて、掃除をせず、その風情を楽しんでいたら、表を通る人が空き家かといぶかしんでいる風に感じられる。外へ出て「まだ住んでいますよ」と声をかけることもならずもどかしい思いをしているのである。俳人らしい住み方である。季語「春落葉」春。六甲

庭隅に棲みついてゐる初蜥蜴
置き忘れ塞の神様花頼み
木蓮や空家つづきの塀越しに
ほとけの座休耕田は紫に
今の年も農止め切れず種伏る
陽を受けて変はらぬ罫初音来る
存へて匂ひ無くして彼岸来る
初分葱茹でてゐる窓少し開け
初蝶のふと見失ふ田面かな